別記様式第６

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博　士（　文　学　）	氏 名	原口　行雄
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目

The Forms and Syntax of Verbs in the Early Modern English and Late Modern English Periods

（初期近代英語期及び後期近代英語期における動詞の語形と文法）

論文審査担当者

主　　査	教　授	地村　彰之
審 査 委 員	教　授	吉中　孝志
審 査 委 員	教　授	今林　修
審 査 委 員	教育学研究科　教授	中尾　佳行
審 査 委 員	京都大学大学院文学研究科　教授	家入　葉子

〔論文審査の要旨〕

本論文は，初期近代英語期（16 世紀初期から 17 世紀末期まで）及び後期近代英語期（18 世紀初期から 19 世紀半ばまで）の主としてイギリス英語で書かれた散文並びに韻文のテキストを資料として，「直説法現在時制３人称単数形活用語尾 -(*e*)*th* 形と-(*e*)*s* 形の発達」と「連続して起こる二つの出来事あるいは二つの行為について述べる際に用いられる時の副詞節を導く接続詞の発達」を「動詞の語形と文法」という統一テーマを基調として，-(*e*)*th* 形と-(*e*)*s* 形との競合関係の時代的変遷，接続詞同士の競合関係の時代的変遷を観察し，現代英語へと繋がって行く過程を論じたものである。

本論文は，序章，第１部（第１章～第４章），第２部（第５章～第７章），結論から構成される。

第１章では，直説法現在時制３人称単数形動詞活用語尾の初期近代英語期までの歴史の記述を基に概説している。

第２章では，資料として使用したテキストを次のように 10 種類に分類し，テキストタイプ（The Bible; biography; essays; fiction; journals & reports; letters, diaries & memoirs; linguistics; official documents; and poetry）により，南部方言の-(*e*)*th* 形が北部方言の-(*e*)*s* 形と競合関係に入る時期ならびに北部方言の-(*e*)*s* 形が標準形へと移行して行く時期にも違いがあることを資料が示すデータを基に解説している。

第３章では，drama のテキストを資料に，３人称単数形動詞を-(*e*)*th* 形のみを取るもの，-(*e*)*th* 形と-(*e*)*s* 形の両方を取るもの，-(*e*)*s* 形のみを取るものの３種類に分けて調査している。

第４章では，第１節では Shakespeare の演劇作品を，第２節では 16 世紀前半から 18 世紀後半までの９種類のテキストタイプを，さらに第３節では 16 世紀前半から 18 世紀後半までの drama を題材に，助動詞用法と動詞用法の２つの機能を持つ *doth, does, hath* と *has* について論じている。第４節では Shakespeare 劇中の登場人物のせりふを基に，登場人物ごとに *doth* や *does* や*hath* や *has* が使用される文脈を考慮し，場面・状況によって人物の話し方が変化することを指摘する。

第５章では 15 世紀後期から 19 世紀前半までを４期に区分して，「～するとすぐに」の意味で「二つの出来事ないしは行為が連続して発生することを表す時の副詞節を導く接続詞」の発達を概観する。グループ毎の接続詞の用法，主節と従属節における述部動詞の各時制と接続詞との共起関係，*no sooner* や *scarce(ly)*や *hardly* が節や文の先頭に来て生じる倒置構造，*as soon as* や *as fast as* が *possible* 等を伴って intensifier として機能することなどを論じる。

第 6 章では劇作における接続詞の問題を考察している。先ず Shakespeare 劇では *so soon as*，*so soon as ever*，*as soon as*，*as fast as*，*no sooner…but*，*no sooner…than* の 6 種類が使われる。一方，16 世紀後半から 19 世紀前半までの劇作では, *as soon as*, *as soon as ever*, *so soon as*, *as fast as*, *no sooner…but*, *no sooner…than*, *scarce…but*，*scarce…when*，*scarcely…but*，*scarcely…when*，*the moment*，*the instant* の 12 種類の接続詞が存在する。16 世紀後半から 19 世紀前半までの散文における接続詞の種類と比べてやや少ない。因みに散文には 24 種類の接続詞が用いられている。

第 7 章では，19 世紀前半半ば過ぎに初めて登場する接続詞 *directly* などについて考察している。*Directly* がよく使われている Charles Dickens や William Thackeray や Matthew Arnold の作品を調査し，接続詞は語りで使用される方が多いと指摘する。使用頻度数が低い接続詞はスピーチでは殆ど使用されない。

本論文は，-(*e*)*th* 形と-(*e*)*s* 形との競合関係の時代的変遷，接続詞同士の競合関係の時代的変遷を観察し現代英語へと繋がって行く過程について，膨大な用例を用いて実証的に例証しようとした点で，今日の英語コーパス研究に大きく貢献するものとして高く評価できる。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500 字以内とする。